

# 専修大学創立一四〇周年記念式典式辞

佐々木 重 人  
(専修大学長)

本日は専修大学創立一四〇周年記念式典にご参集くださりまして誠にありがとうございます。また、本日司会の桂小文治師匠にもご協力いただけましたこと、誠にありがたく存じます。実は、コロナ禍が収束していれば、本式典後に三階の黒門ホールにて「黒門ホール寄席」を開催し、小文治師匠に名調子をご披露いただく予定でした。機会を改めて企画したいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

私にとって、本日の創立一四〇周年の意義は、その記念事業の陣頭指揮をふるっているさなかに急逝された前学長の矢野建一先生が今日の日をめざして掲げておられた目標を確実に引き継ぎ実現させる日にあたります。

それは四年以上前のことですが、矢野先生は、すでに神田キャンパスや生田キャンパスが創立一四〇周年を迎える姿を明確にイメージできるほどに具体的な事業案を策定し、法人側とも共有しておられました。私の学長就任以降、ここまでの四年間の作業は、国際コミュニケーション学部の新設、商学部の神田移転の準備、二部三学部の学生募集停止など、大きな変化を伴い、学生からの期待と戸惑いも同時に感じるがありました。が、教職員、校友会、育友会など多くの方から力強いサポートを得て、結果として学内外にあった諸課題を解決しながら、順調に進めてこられたと思っております。これで、なんとか矢野先生に計画完了の報告ができる

と感じております。

今回の記念事業の肝は、学部・学科の新設・改組など「社会知性の開発」の「見える化」を実行しながら、新しい時代の教育・研究のあり方を構築すること、そしてキャンパスのある地元地域との関係を一層深化させること、さらに校舎の新築や建て替えを伴いながら、生田と神田、両キャンパスをより美しく造り込むことにありました。この建物（神田一〇号館）がまさにその象徴になったと思います。ただ建物を造ればそれでよいというわけではありません。そこに集う学生と地域・社会に対し、大学としての役割を十分に果たしうるキャンパスを創立一四〇周年を目標につくりたいと考えてきた次第です。

来る二〇三〇年の創立一五〇周年に向けた道筋は、ウイズコロナからアフターコロナの時代のなかを歩むこととなります。特に今年の一年生、そして来年度以降の入学者は、これまでの大学生とは異なるスタイルの学びの世界を経験するはずです。本学は、これを地球的規模で生じる教育・研究上のパラダイムシフトと捉え、大学教育・研究で新たにできることや行わなければならないことを見定めて一層精進し、まさに令和版の「学校をつくろう」に取り組みもうと思えます。

今後とも皆様からの変わらぬご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。学長の式辞といたします。本日はありがとうございました。